

**実存主義かマルクス主義か**

第二次世界大戦後の日本の思想界では、実存主義が一種のブームになった。このブームは 1970 年代まで続いたが、その特徴はマルクス主義との関わりの中で実存が一つの“主義ism”として問題化されたことである。キルケゴール自身は人間の実存的あり方を強調したが、それが実存主義 existentialism であるとは一度も言わなかった。彼はどこまでもキリスト教との関わりにおいて、実存的主体としての人間存在を問い深めた。実存主義という言葉は、むしろサルトル Jean Paul Sartre (1905～1980) に帰せられるものである（戦前はもっぱら実存思想、実存哲学という言い方であった）。

戦後の実存主義ブームは若い世代を広範に巻き込んだ。キルケゴール、ハイデガー、ヤスパース、サルトルの邦訳著作集が陸続と刊行され、学生たちは争ってこれらを読んだ。1954 年には実存主義協会も設立された。とくに 60 年安保と言われる学生運動の時期には、「実存主義（主体性）か、マルクス主義（社会性）か」という「あれか、これか」がイデオロギー論争の焦点にもなった。ただし、この「あれか、これか」を先鋭化させたのはハンガリーの哲学者ルカーチ György Lukács (1885～1971) であって、サルトル自身はマルクス主義にヒューマンズムを導入する思想として実存主義を構想していた。

そのような実存主義ブームの中、キルケゴールは実存主義の元祖ということで喧伝されていた。その最盛期は、キルケゴール没後百年の節目にあたる 1955 年である。この年、法政大学を会場に「キルケゴール百年祭」が開催されたが、会場には実に 700 人を超える聴衆が詰めかけたという。

だが、現在の状況はどうであろうか。劇的な変化を示したのはマルクス主義の退潮である。すでに 70 年代には社会変革の思想としては魅力を失っていたが、1989 年のベルリンの壁崩壊、さらには 1991 年ソ連の崩壊により、国家の主導理念としてもこの思想は一挙に色褪せてしまった。そしてマルクス主義の退潮とともに、実存主義もまた思想の表舞台から退場を余儀なくされてしまったのである。

**関係の中で問われる実存**

こうしたことは実存思想のある特徴を示している。つまり、実存はそれだけで問われるというよりは、これと対立する何らかのものとの緊張関係にある時に、その意義と課題が出現するという性格を持つものなのである。キルケゴールの場合は、神との関わりにおいて単独者としての人間のあり方が強調され、キリスト教との緊張関係が問われてくる。サルトルの場合は、社会との関わりにおいて主体的な人間のあり方が強調され、マルクス主義との緊張関係が問われてくる。

そのように何らかのものとの関わりがなければ、実存は現実との足掛かりを喪失してしまうのである。実存とは、本来、主義主張でもなければ、哲学思想ですらない。むしろそれら以前の人間の様態を指す。すなわち、実存とは、ありのままの現実の人間の姿であり、私自身がこの現実の人間であることを自覚することなのである。その意味で、「覚存」という言葉のほう

が相応しいかもしれない（かつて覚存は existence の訳語として採用されたことがあったが、これは定着しなかった）。

実存という概念だけを取り出し、これを主義やイデオロギーにしてみたところで、それは全く抽象的なものになってしまうだろう。信仰や社会などのような緊張関係を持って迫る対立項がない限り、実存は思想的深化や現実的展開の手掛かりを見出せず、まるで土俵の中で独り相撲をしているばかりとなる。キリスト教に限らず、宗教との緊張関係がなければ実存も思想として限りなく浅薄化されるし、マルクス主義が魅力を失った途端、これとの対立項とされた実存主義もイデオロギーとして雲散霧消するのは、もっともなことなのである。

**生命倫理において問われる実存**

だが、近年になって、意外なところから、にわかに実存の問題が問われる場面が出てきた。それは生命に関わるテクノロジーの方面からである。私は私以外の何者でもないというのが実存の基本的観点であるが、移植医療はそのあり方を身体性の場面から変容させてしまう。それは、私の身体の一部を他者の身体の一部と入れ替わることによって、生身の人間のレベルで他者が自己の中に組み込まれることを意味する。

また、細胞クローン技術によって自分と同じ遺伝的特徴を持つ他者を産出したり、遺伝子操作技術によって遺伝子のレベルで人間を改造したりするならば、私という存在はいったい何者になるのだろうか。人間の遺伝子を組み込んだ動物の臓器を用いた異種移植が現実のものとなれば、人間と動物の境界線はどうなってしまうのだろうか。

そこで先鋭的に問われる実存は、身体的生命との関わりにおいての新たな問題性となっている。身体的生命は、文字通り生身の人間を成り立たせる基盤である。他者の臓器に対する拒否反応を抑えるために、臓器移植を受けた人が免疫抑制剤を飲み続けなければいけないというのは、身体的存在でもある人間の実存を考える上でも深い示唆を与えてくれるように思われる。

テクノロジーは日進月歩である。極端な話、AI（人工知能）の技術が飛躍的に進展すれば、将来、意識や感情を持つ AI も出現するかもしれない。そのような AI は確かに「覚存」であろうが、そもそも AI には生身の身体が全く欠落している。果たしてこれを実存と呼んでよいものであろうか。

これらの問題は今ではもはや、SF 的な空想物語として片付けてしまうことはできない。科学技術の進展に伴い、身体的存在としての人間のあり方が強調され、生命操作のテクノロジーとの緊張関係が問われてくる。それが今日という時代なのである。このテクノロジーは、難病治療に光明をもたらしてくれる一方で、対処の仕方を誤れば、人間改造という形でその身体的基盤を掘り崩してしまう恐れがある。

生命操作のテクノロジーとの関係は、19 世紀的な神との関係、20 世紀的な社会との関係と異なり、まさに 21 世紀的な意味での実存の課題であると言えよう。それは未知であり未開拓の領域における関係性の問いである。実存的生命倫理はようやく緒に就いたばかりなのである。